

優秀賞

おじいちゃんとのキャッチボール

大阪府 福田尚希

祖父が脳内出血で倒れたと祖母から連絡がきた。僕はとても驚いた。祖父はとても元気な人で、遊びに行くといつもキャッチボールをしてくれた。そんな祖父が倒れたなんて僕は信じられなかった。祖母が言うには、命は助かったが障害はリハビリしても少し残るらしい。僕はもう祖父とのキャッチボールができないと知ってかなりショックだった。

連絡がきてからしばらくして、祖父が多少話せるようになったので、病院に行くことになった。僕は病院へ向かうバスの中で祖父と何を話そうかといういろいろ期待しながら考えていた。祖父の病室に入ってみると、僕の期待は見事に裏切られた。僕の想像していた様子よりかなり悪かった。祖父はベッドで寝ていた。祖父は乾ききったように痩せていた。僕が近くに寄ると、祖父は目を覚ました。祖父の目には元気だったときの力強さは感じられなかった。祖母が「この子、誰かわかりますか。」と祖父に聞いたが、祖父は答えることができなかった。僕はとてもショックだった。僕のことかわからないなんて、裏切られた様な気持ちになった。祖母は僕を励ますように、記憶は時間が経てば戻ると言った。そして、そのためには会話をするのが良いと教えてくれた。たしかに祖母はいつも以上に祖父に話しかけていた。なので、僕もいっぱい祖父と話をしようと決心した。

普通のキャッチボールはもうできないけれど、言葉のキャッチボールならできるから。今はうまくボールは返ってこないけれど、気長に良いボールが返ってくるのを待とうと思う。がんばろうね、一緒に。